賢女
全傳

千代物語

二

ヘ 13
3037
2

門へ 13
號 3037
巻 2

千代物語巻の二

目録

○桂鬼雷右衛門悪計の事
附り 笹川きこあぎやくする
○笹川藻谷の乱を遂る
附り 岩屋の庄殺害名のる

山陽奇談 千代物語 巻之二

東都 鼻山人 著

三

桂鬼賈右エ門熱糸を弄する
附り 蚤川を歌くする

其れ初め成ざくして破れ安く時の世ぶくしく
死るの人安しとうや商時中國の大門家の威風
伏せざる者なし死が中ふ彼後の國糸辺の撰ち相原
宮内少輔忠典防列の下知ふ従ずして列の尾子

時ふんざーを通じられがいそだ近代あるべーとて
陶中勢を捕隆房を大将として軍を向ふ余人
後の逆へ義向ーー城を責るる火急あり忠真
外ふ接ぎの助けなく辞先後ふ裏へーらびあるを
一命を助けるべ迷うふ城を明渡まべーとく忠真
隆房が陣ふ乗れどその家ふまるも忠真が一子要
寿丸と三戈ふなりうるを人質ふとり近辺の仕置
伐海法ーー防列へ赴き庫ーる大門家ぐんの

人質をとりその後隆房へ渡られる家と推鬼
雷右三門宗是といふ者あり元来義隆の児ふ性
伐倹雪させる勇功もあらざるが終ふ孫要
冥臣とそのう自拉と一国ふ我家と裏人権威
なんかーて法王の清徳をそのうへとそのう
実ふく国中の虜女あるひとの婦女をもあるまー
威光ふまうせく集ひとりあるふ嫁楽ふ秘りし
その頃義隆世家の繁家ふ屋ーくーー急ぎ

日ごろ驕奢をつくして自然武備衰へ
乱世の端となりぬるその頃京師の主法いとゞ
ものがたく室町将軍義輝公も副臣ふせがるる
天子あるはの御帰位その費ふ俗のつぎ国用足ざり
し残大内家より義興まで治せられて帝位連
綿として恙なれども俗あるべう大内家の忠勤ト敬意
ならびしうべ俗ふ位階昇進して日の出ふ昇が
ごとくその姫あるく生まるの種勢も満るのの矢安く

義隆一遊一緑の夜ふ誅られしうびその矢徒ふもを
恨まるふ知るふ此と死陶隆房も叙爵しく
尾張守時奥と改めしが時を何ぞ生ら墓逆の
山であるふ智臣賢士の家ふ大内家の末ふ知れとぞ
笑ひるされば桂鬼霊右エ門も陶が持尾ふ造りく
故のれがんの作ふ下手を虐うれども俗あるて義隆の
耳へ達する者なきあれもあるし氏霊右エ門義
興川俗ふが娘ふ代が戈色とも不安ふ待遇を義を

又ゆゑなくして夫のれが配偶の赤縄を結ぶんと乗と乗四所
望〳〵けしからぬ深ふかうんこゝろ者なれば桂鬼が
慕恋の心にてを憎〻ふるるもせず剥へ我一人の
美女を同学ぶる桂鬼なんどが所妻とまぐべき侍るべ
候あがら侍士の道をも知り君の為ふ一城をももろ
ぶき人なるべけ子を配偶て苗字のるをも変さく
却りのあるうされい世の中の人の娘を嫁もるをえんゆのふ
多くの夫家の家老人伐桂を捕ゆき其人の支徒

をも顧ずして彼家老人桂男の上を掠め下を奪ふ
門なれば虎の威を假狐のごく桂日の尾きるり
をば新くぐらず勢ある者の国ふろる時ハ侍者を
掠奪まんハ氷りの山ふ岩うて人を引〻と嘲るがど
兵却れを縊ざう賢支を求び勢威をもつて人を
凌がざるを実の侍士とハ謂ぐ〻歌のごき人ふ
あ彩紙きのるをも結び納めるべ男ふ婚よとゆ
るとも面目るらんなど却く桂鬼を朝うれば

雷右エ門は是より猛ふを背負ふて飛ぶ塗まくらの人ふて娘を吾ふのうぐきごと其
者の様子を思ひ〳〵るが為ふ出〳〵るの
あれば先陶尾彦右衛門時賢を縛らひ為て養川
猛ふ恨あれば母乗源を飛ぶ塗〳〵けんとぞ
縛り為ふ妻ひあるう者家の様く新ひ
人賀の孝寿丸を特〳〵の程すまふ白新ケ人色
その外筆い那のごと〳〵と唱きくれば時賢も

為て大望ある者あれば結〳〵ふ代雷右エ門を一番の
力とも頼むべ〳〵とおもひくれば人妻く為合て彼人賀
の孝寿丸を雷右エ門つぞ新ケ為る新て猛鬼ハ彼ふ
の家人ふ寄外をいひ含むれば為ふ為く為為〳〵て
主国浪人のさるふ姿を宮し寄ふ猛ふ方の授
す子をぞ何ひ為る為為外為為ふ為の和ぞ
〳〵ある日近村ふ新拝て為ふ和んで為ふ為る
道の辺ふ一人の浪士為為なるの様ふて新〳〵三戈

ぞうある嬰児を懐中に抱きあるくとて歩き
居強盗が下駄の袖を引うくを悔うあきるもあるつ
駄く車に頼ひかるるのは法度なれと云べ
強盗い馬より下りていらぬ者あて彼ひとに物をるぞと
問ふれば浪人い土に行ひを突て出彼ひとをい解の
茶ふあるべき某るの京家の浪人あてひが考後の
大友家に和縁あるく氏息が母を伴ひ親子人
母すぐらに立いで御氏地まで参しが妻あくひ

者俄ふいさうるのあるく三日い来ぬ寝てゐ
祝ひくゆくども母に一銭の用意るれば乳飲を
ふ理を氏子を某懐中ふ入足九列まで誠ひうんふ
乳一下にあるべきやうもるく出あて進退窮ふ谷
てゆくで足水るく刺新捨んと指ひ切てのきら
ぬ人さすが思先の摩るの今朝より食を
いめて先やせ母と思案のうち測ぶの
服の通りを元熱ちり出彼ひ中上れ何事君の

うらき桂鬼の家くすぐく姿を窪して
妻川を
まきぬむく

るかに二八六

仁志まて此見を此捨ひ申されし門方まて乳母と
も申てたびのうらびまひ奉命動うり申す
人安く流涙仕り夏を申仕り人無ふ安よ立ル
程の身申ありいつでその時とも人今日の大事を申
殺ド申り此子の生を見申て再け申スぶ〜まて示
いつ知ぬ方とも存ド申らず兼度の陸いふべうも
あるざる彩ひまて少くども身の難儀に相案ちされ
此殺ど一命を捨のひたびまで此身此程飢ふ仕ろ

まて罪とも賞る恩の下より殺恩謝徳ハ仕らん
ふ殺ふ殺ふ死体あてやうれば涙ふ流ふ悲よう義
見聞ふ者あれば涙を流ふ悲く窮途の
此難ふ家ふ〜へ申たう又東西を申無人ね嬰児を
此仕ふ都ふ申ふんをいうぶう又捨申べき実ふ可夫
夫ふ明日をも知ず人の身のうくとも存仕らず
ふ度此身の時命まで此の子を申ふ〜新ふ生
ぶ〜此ふ生きひあく人安く生れを仕のひてその

時あでこく再会結まで〳〵と若党ふ命じて伴の
小児を拘きと見び浪人者も形をこ上ケず彩まで指
付ケある世形ひを速うふ義〳〵まのるの又あ死
此子ご天運のさぎる和ぎ世〳〵此厚恩と思れ
まるべきまつ法と脈かて立別是ろを強ふ指一と
ぶとぐり是ふう巻列までもいまご遠けき婚の程
狂ふ先ふ結れと慣うふ源ひ方もあるまゝ〳〵なれば
尚分飢を濃るべき用意まくとハ叶ふまじ是ハ

第〳〵ごすし表まごう書途の用ふまいぐまること金子
こ表元出〳〵て家〳〵れば浪人者も拝ぎして小児ご
一命を都ひまるのまるふび路用までのらんるの
いふ〳〵ても実意の程思れ多〳〵小児さ人ご親れ
ねるる〳〵ハ吾多ぬとろいいふ如銀銭幸者〳〵て人ふ
拘ぬてるその日の飢ハ多ぐ〳〵ハ金子ハ新世ふ
拘ぬ〳〵るまるるの修ハ山垂の人也ト長屋結〳〵
拘ぬ〳〵尚附巻後の大友家と大門家ハ合結

のるものなれば命をかうくまつて又糸仕らんとて家
うきぐまき毒色もあらぶんば猫ぬ今ハ是非もなしと
姫ちゝ立別是ちうう

四

箕川夫婦薄命の記を写る
岩國の庄郷岩石のる
話説箕川猫ハ奸曲邪佞の方便とハ異なり
ふあらはしこ〳〵ハ道もぐら彼涙〳〵
第操を感じ吾家へ入て妻娘ハ朝と吉

別ふ乳母を亦人を分てぞいさうる吉程ふ
陶尾淡ちハ遠敷へ出仕して義隆ふ年
猫ふ〳〵佞ふ邪ちあうる損ふの人賀妻寿丸
る是て怠ちぶちハ和ふ世後乳母ある者ふ
とふ伊國とふあく多くふ損ふちハ奪ひ
西せ〳〵う又出門ふ敵ハ間通の人ぞ〳〵あるのの抔の
塗ゝ出せ〳〵ふ汁うがう〳〵某〳〵会合の罪科逃て
和あるれば切腹をふ結さんるの人安〳〵といえども

容易あらざる敵国の人賀べいうち新乱の増
とものあらんかと若えいとだに絶えふねのびゆと大
鬼綱ぐかりうふぞ我慢たきふ鬱きて丈とこ
一大るのあり奪ひえ〳〵ものいまぐまくらと溶ほし
迷うふ会幸のえ配して一時も幸く撫〳〵堂ぐと
若ふし〳〵ふね新〳〵ものべ番所物所の間〳〵進く
人報を繰出〳〵第をこ分てぞ幸れうる係うの新
丈桂鬼霞右工門い新第山の面形〳〵純寄て倣も

世幸孫あり佐ア掲京家の人賀寿丸がる
釜川猪四ガ方ふ居〳〵垂る横うふけのうら
布けぬいそ紫ガ宿丈を世幸れゆいやと中
うれべけを移さぐ向のべとて多幸ま平室
田長左夫あ人ふね新〳〵猪四ガ宿丈狂向い夫
有音の返言を伝ぎて釜川ガ一族を捕まぐ
又霞右工門芥川左命没屋保は人い人賀り新
寿丸を奪ひ返て〳〵と合ぜらるれば四十八

とこ
長まつ
まうえ
扨
とるの
物めを
敢ず
妻川が
宿五く
形
向ひ
きのと
むろさ
室田へ
きび〳〵
こうがして
経年百金
人を二ふ分
裏口表口
ふたつ
又〳〵
とを
国へで
上
の
仕
ぜ
源氏
ぐ
ふ
在
と
ぜ
ろ
れば
妻川
物のひうけぬるのまれば
の用
言
物
べず
イ
待
だろうあて
立出
ろを
人
尤
存
ぜ
彼
と
絶
コハ
行
の
ぜ
ぜ
ぜ

仏ごるの出来るぐと周章戦慄さるひるる人
猛鬼霞右エ門芥川太郎次郎安藤室田ホ入彩り
勇と乱れ入れ乱れその混雑いふべうもあらずまづ
乳母が抱きー喜寿丸をー奪んとすると強ぶど
妻をーもとおてコハ仏ゐるまで初めのまでもなー
捕まれ捕まれ捕まれ人の義理ある若者ハ根
絡ーてあやまり去ゆくいふ太郎次郎をいろ
らー仏象上ての仏をびゆーるき者どもまんと

ゆるべハット言って大勢村ーと立ち寄り寿
丸をー奪ゆく立出るを強ぶど妻狂も弱ぶど
元撫ーを霞右エ門ーー除抜打ふ切仏ーー立ち
投出ふ二ちとあくー鬼絶ーその乃ふ狂乗
ども走り出て家門の男女四十余人残らず揃ひ
元士撫を踏立ーー立ゆ出べ猛鬼いさるあくー
ふ代ハいづくふト尋ね出るふその姿ふ人ーーー
一大るの代物をを通ーーる孫会さまと家門の

らぬ〻ぐ〻殺りあく〻事すれども行衛知れぬが是非
なく〻芥川法とも孝寿丸姫の因人まく〻
石見〻と無形く出れ引とりね偽も深ふい人
賀くある事寿丸とも無まくぼ家ふ出る言月遠し
るの始末詳うふ中陳るとりく〻とも絶ふ寇の罪
明らうるるを以ず四十二年の末の秋罪囚の法
永興寺ふ拘のく〻切役付られ家絶ハ悪く
官府へ石上り義川の家ちく〻死絶ふ拘よびる

るふ深ふが遠ちと〻て紀雅を焼内のうちふ
拘めて一ッの撰とま〻ちるの石牌かとろどろ
殺うるが此和の風来他ふ知まれがそのとの
ちの妻中まを平室田長ちまくのまくまるえがそら
永興ちくの事殺深ふが撰の義ふ見ぬ
怪風ふ牝されまくとも絶偽せ〻ぶをれう主元
高ひとまつく殺ふ名下の岩とぞまうふる
まきてのうくく見れをまて此撰の辺りく書の

うるとまうしうるゆへ里人書始で報恩者と
りの今まで岩国の殿不存せうしだまうと
るどまう

千代物語巻之二終

千代二ノ十五

四海兄弟

[illegible]